

三鷹まちづくり総合研究所「サステナブル都市三鷹研究会」  
第5回議事録要旨

日時 平成23年10月18日(火) 午後6時～午後8時

会場 三鷹ネットワーク大学

出席者 濱野周泰(座長)、矢内秋生(副座長)、朝倉薫、斉藤伸也、高畑智一、  
岩崎好高

事務局 三鷹市環境政策課 三鷹ネットワーク大学

【議事録要旨】

(注)この議事録は抄録であり、すべての発言が掲載されているものではありません。

○岩崎研究員 「サステナブル都市三鷹研究会」報告書(素案)の説明をする。—中略—

○斉藤オブザーバー 追加資料「三鷹市における太陽光発電量の推計及び費用対効果の予測値等」の説明。仮に市内の電力の50%を太陽光で賄うとすると、市内の面積の65%ぐらい。もし100%太陽光で賄うとすると市の面積よりも大きくなってしまいう「サステナブル都市みたかのイメージ図」の説明。緑や森が重要な役割を果たせる。森や緑の木の作用は、環境保全では、CO<sub>2</sub>の削減、空気がきれいになる、水、防火、防風、日射、ヒートアイランド対策など。人間という視点では、休めること、レクリエーション、安らぎ、環境教育など。その他に、動物生態系、経済の集客力などの効果がある。そして、整備された公園の周りは地価が高いというような話もある。このようなものが作用し、緑というのを置くだけで、そこに自発的にコミュニティが生まれることも期待できる。—中略—

○斉藤オブザーバー(企画部) 「PREを活用した合理的な公共施設管理」について説明。サステナブル都市への方向性に入れてはどうかという提案。ソフト・ハードを含めて持続可能な都市の再建や、再生を目指すのが1つのサステナブルの施策の1つなのかなど。

○岩崎研究員 「三鷹市におけるサステナブル施策の基本的な考え方と展望」の意見をお願いしたい。

○濱野座長 これが、だれに向けてなのか。ねらいをしっかりと整理するといい。また、公的不動産のマネジメント PREの話が出た。全面改修までは費用を投じなくても、それをずっと使いこなしていけるという、そのこと自体が世の中に無用なものをつくり出さない基本だと思っている。それともう一つは、教育が僕は重要だと思っている。子どもをこれに向けて育てる方法を考えた方が、いいと思う。

○岩崎研究員 三鷹市らしさや三鷹市がこうなったらいいだろうという理想的な部分も含んだイメージの図ができれば、それが広がり、これからの施策を展開する上で4次計や環境基本計画の中で、エキスやイメージとして取り込めればいいのではないかな。

○濱野座長 三鷹の本来あるべき大きい資源のところまで少し目配りしたようなエリア設

定というのができないか。エリア、エリアをつないで住宅地域へ発展させるなど。

○岩崎研究員 スマートコミュニティとかスマートグリッドとかで、そういうコミュニティができるようなところがあればいいだろうという流れがある。

○矢内研究員 現実的なところで、できる範囲のかなり堅実なアイデアが盛り込まれていると思う。しかし、「行政の役割の明確化」というところがまだ明確になっていないが。

また、何をアピールポイントにするか、あるいは何を施策として市民の方に向けるかということが、ポイントになると思う。

例えば、どこかにテレワークというキーワードがあったが、このテレワークイコール個室空間、SOHOという切り口で述べられているが、スタバ形式の、まさに Wi-Fi の時代になっているので、いつでもどこでもだれでも、そういう環境があればそこで仕事ができるという形で、行政が側面をサポートするというやり方もある。

また、大学生が起業するときに、もっと起業しやすい環境をつくってあげる。当然、それは起業というだけではキーワードにならないので、低炭素型産業を起業するとか、かなり大胆にサポートするというのを、行政でやってほしい。

そういった行政の役割の明確化という辺りで、もう一歩か半歩か、幾つか出てくれば、これの全体の流れも少し受け取り方が変わってくるのではないかという気がした。

○岩崎研究員 研究会の報告書を作成した後、来年度以降、庁内チームをつくって検討をつなげていきたい。例えば、地区計画の議論は、まちづくり推進課がいらないとできないといったようにさらに庁内連携を進めたい。また、コミュニティの創生は現在進行形で他の部署が研究を行っている。次は庁内チームの中で、この代表的な要素をこの報告書に基づいていろいろ議論を進めて、細かい部分に踏み込めるような土台をここでつくっていききたいと考えている。

○朝倉研究員 この報告書がどう活かされるのかというところがやはり気になった。

このような施策によってどんな付加価値が生まれてくるのかというところをうまく落とし込んで、そのメリット・デメリットみたいなところが多分あると思うが、それの中で、どういうことをしていかなければいけないのかというところを、もう少し具体化できるといい。今回、「緑」が三鷹のキーワードかなと思う。多分皆さん共通認識だと思うので、それをどう落とし込むか。

○岩崎研究員 それが斉藤オブザーバーのイメージ図であり、これが近いのかと思っている。

○矢内研究員 ヨハネスブルクサミットのフォローアップを日本政府が求められ、外務省が、日本国としてこのような取り組みや方向性で行くというものの最後のところに、質の高い持続可能な社会を目指すと書いてあった。

○濱野座長 生物多様性は、今の生物の持続性を担保するということを言っている。持続性が細るということは、多様性がどんどん少なくなると、1対1の関係になってしまったら、もうそれはいつ切れるかわからない。それが複数あることで、それを相互に補完して

いる。要するにプラットフォームづくりだろうと思う。

プラットフォームというところで、きっかけをいろいろつくってあげられるといいのかと思う。

○矢内研究員 今ある資源とか産業だけを射程に入れていると、限られたことしかできない。逆に、こういうような形のまちづくりをしたいとか、あるいは環境に配慮した産業を育成したいと決まったら、外から連れてきてしまえばいいと、そういう発想もあっていいのではないか。

○高畑研究員 生産ラインが長い、大きい工場は、三鷹でなくて他の地方でやることも可能だ。そうではないものを三鷹に誘致をして、担税力のあるところを呼びたい。企業誘致条例に関しては、最初は税を還付していくのだけれども、最終的にはきちんと税を支払って、活力を出したいということで、今、動いている。

○大朝事務局長 例えば市民として考えたときに、環境保全の視点で、環境に配慮した都市とか、地球温暖化対策があるとか、一つひとつの項目に対して、市民として、市民の視点から見て何ができるか、どうあったら望ましいかということは市民が考えることである。行政が考えることは、方向性は仮に同じだとしても、そのサイズなりアクションなりが全然違う。

だから、何かそういう視点で、市民視点なら市民視点、行政視点なら行政視点、担うべき役割や、場合によっては義務だったりするかもしれないが、そういうものが具体化されると、わかりやすくなると思う。

ただ、全部についてつまびらかにするというのは、現時点では多分無理だと思うので、例えば絵を描いていたり図を書いていたりすることで、具体性を出していくと、市民にとってのわかりやすいものができるのではないか。

○斉藤オブザーバー 緑をつなげるのであれば、深大寺を避けて通れない、住んでいる人はこの垣根は気にしないだろうなど。何で深大寺が入っていないのだろうと。

○岩崎研究員 「国や都、近隣市との連携」というのが書いてあって、ここもやはり課題であり、キーワードである。

近隣市との連絡調整は必要で、課題もあるが取り組んでいくことが大切である。

○濱野座長 市民は、行政区は関係ない。でも、本当に難しい問題だろうと思う。

○大高オブザーバー 多様な人たちがいるからこそ持続していくのではないか。単一的な都市とか単一的な人々だとか単一的な何々というふうに凝り固まってしまうことが閉塞性を生む。この会議でもいろいろな資料を見ながら自分なりに考えた結論でもある。

○斉藤オブザーバー(企画部) 最初の EU の事例から、日本の事例があって、では三鷹市にということで、かなりスケールの大きい話から、三鷹という 16.5 平方キロの中での話という、かなり規模が違う話を集約している報告書なので、話が飛んでしまうのはある意味いたし方ないのかなとは思う。

この報告書に対しては、環境に特化したようなことがあるので、教育とか産業に対して

は薄い部分があるが、それはまた最後の行政の役割とかコミュニティ創生と絡めて引き続き検討はしていくことが必要だと思う。

行政の役割の明確化は、今後の課題というか、4次計で示していかなければいけないところの一つでもあるので、サステナブルというのは全部をひっくるめて持続可能性だと思うので、今年に限らず来年度以降も検討が必要だと思う。

○高畑研究員 サステナブルというとすごくイメージが広く、今、示された町が、三鷹が目指す到達点なのかというと、そうではなく、単なる通過点なのだろうと。環境にシフトといいますか、色濃く今回のはできているけれども、健康福祉にとってのサステナブルとは何だと問いかけをして、そこから我が方が考えるサステナブルはこうだと、教育分野、教育委員会が考えるサステナブルとは何だ、それから市民部が考えるサステナブルとは何だということで、やはり、ボトムアップで出てくるサステナブルを抽出して、そして取り込んでいかななくてはならないのかなと思っているのが1点。

それから、報告書は、市に対して報告が出てきて、この中からエッセンスを得て、そして市が行政としてこのサステナブルを展開するためにどういう行政施策を打ったらいかということ計画に盛り込んでくる。そして、企業や事業者が何をしなければならないか、市民は何をしなければならないかというようなことだと思う。

そのサステナブルも、古いものをずっと継続していかなければならない、つまりは伝統の継承だとか技術の継承だとかもサステナブルだと。それから農のある風景や緑のある風景も、それもサステナブルだと。更に、科学の進歩によって立体テレビなんかはどんどん進歩して、それが取り込まれていって、科学の進歩によって生活していくのも、それもサステナブル。古きも新しきも一緒になってサステナブルを形成していかなければならないと、すごくここは大きなテーマになっているのではないかと思う。

—閉会のあいさつ—

○矢内研究員 サステナブルというのはそれぞれの部署で関係があるので、これが是非、総合計画ですか、そういった市の大きな計画にどんと座って、もし理想を言うのであれば、市長直轄の部署ができて、そこが推進していくとか、そういう形になるとすばらしいのではないかと思う。その一部でも協力できたのかと、できればいいかと思っている。

座長の濱野先生にいろいろ助けていただき、短い会議であったけれども、大変充実して、そしていろいろと勉強をさせていただいた。皆さん、どうもありがとうございました。お疲れさまです。